

---

愛知県立芸術大学音楽学部

愛知県立芸術大学大学院音楽研究科 博士前期課程

## 令和2年度(2020年度)卒業論文・修士論文要旨

---

卒業論文

### ブラームス作品のソナタ形式——動機展開と再現部導入に焦点を当てて——

遠藤万智 愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻(音楽学コース)

#### 要旨

19世紀を代表する作曲家であるヨハネス・ブラームス Johannes Brahms (1833-1897) は、自身の作品に積極的にソナタ形式を用いている。18世紀に確立し巨匠たちが用いたソナタ形式を、19世紀当時積極的に用いたことが、一般的に「保守的」と言われるひとつの理由でもあるとも言える。しかし、そのソナタ形式を用いた作品の中には、到底保守的とは言いきれないような「革新的」な形式の作品が見られる。本研究では、一般的に保守的であると言われるブラームスが、保守的な作曲家の枠に留まらず、ソナタ形式においてどのように革新的な手法を取っていたのか。それを明らかにし、そのソナタ形式が高く評価される理由を探る。

論文全体は2章から構成される。

第1章では、ソナタ形式の起源や他作曲家のソナタ形式を概観し、ブラームス作品のソナタ形式が音楽史の中でどのような位置にいるのかを考察した。ソナタ形式の3部構成の性格は、提示部に対して展開部・再現部で解決するという、2部形式的な性格を持つと言える。その起源となるのは、バロック以前の舞曲に見られる2部形式であり、その後半部分での「冒頭の再現」や「調の復帰」が、現在の再現部を彷彿とさせるものである。18世紀にはルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827) などの作品により展開部が発達し、その中で主題労作が特徴的となるが、再現部は起源の2部形式から来る「解決」という役割を明確に持っていた。その役割は、ソナタ形式の自由度が増す19世紀に活躍した作曲家たちによって崩れていく。ブラームス作品のソナタ形式も、再現部の導入が曖昧になることにより、展開部と再現部が一体化し、展開部や再現

部それぞれの役割が失われているものがある。ブラームスはそのような形式を用い、先代の作曲家たちの影響を強く受けながら、ソナタ形式において大きな成功を収めたと言える。また、展開部と再現部が一体化したようなソナタ形式は、ソナタ形式の根本的な性格である2部形式の性格が強く現れていると考える。

第2章では、その「革新的」要素が具体的にどのようなところに現れているかを、実際にブラームス作品のソナタ形式楽章を詳細分析することで明確にした。革新的要素として、ソナタ形式の動機の展開の手法と、再現部への導入の仕方という二つの事項に焦点を当て、それぞれ第1節と第2節に分けて詳述した。ブラームスのソナタ形式楽章は数多くあるが、本論文では上記の二つの事項の特徴がより現れている、ピアノ四重奏曲第1番ト短調 作品25 第1楽章、交響曲第1番ハ短調 作品68 第4楽章、交響曲第4番ホ短調 作品98 第1楽章を分析した。第1節「動機展開」では、主題間での動機の展開の手法に着目した。筆者自身の分析により、ピアノ四重奏曲第1番第1楽章の第1主題、第2主題は、動機的繋がりが非常に強く、さらに楽曲全体を通して、第1主題群で登場した4つの動機で構成されているということが分かった。交響曲第4番第1楽章では、冒頭の3度下降の動機が様々に展開されているが、その展開は第4楽章にまで及び、楽章を超えた展開が見られる。第2節「再現部導入」では、ブラームス作品のソナタ形式でよく見られる、再現部の導入部分の曖昧さに着目した。特に異質なのが、第1章でも触れたように、再現部の導入が曖昧になることにより、展開部と再現部が一体化したような形式になることである。これは、ピアノ四重奏曲第1番第1楽章や、交響曲第1番第4楽章に特に分かりやすく見られる。この展開部と再現部の「大規模な統一」により、展開部と再現部は本来持っている役割の重要性が薄くなっており、また楽章全体の2部形式的な性格も強くなっていると言える。

ブラームスが一般的に保守的であると言われるのは、先代の偉大な作曲家を熱心に研究し、その様式を積極的に取り入れていたことが大きい。しかしながら、「保守的」で終わることなく、高い評価を受けることとなった理由として、彼のソナタ形式に現れている「革新的」な部分が強く関わっていると言える。筆者自身の分析により、動機展開と再現部導入は、他作曲家にも見られないような手法を使っていることが明確になり、このような形式が革新的と言われ、高く評価される理由であると考えられる。